

季報

二松学舎大学附属図書館 Quarterly Report

- P2 犬も歩けば棒に当たる 王宝平
- P3 私の好きな小説 中谷いずみ
- P4 私の読書遍歴
—経営学の研究に必要な思考が磨かれた日々— 小具 龍史
- P5 国立国会図書館「図書館向けデジタル化資料送信サービス」を開始
- P6 発想力 UP につながるホワイトボード活用術
- P7 本学所蔵資料紹介 / 新着図書 おススメの1冊
- P8 本学教職員著書紹介

No.106

2019(令和元)年 11 月

犬も歩けば棒に当たる

文学部中国文学科 教授 王宝平

日本語の勉強のため、成語やことわざをたくさん覚えた。そのうち、「犬も歩けば棒に当たる」が最も好きなことわざの一つである。物事を行う者は、時に禍いにあうというネガティブな意味もあれば、やってみると思わぬ幸いにあうというポジティブなたとえとしても使われる。

清末中国の政治家康有為（1858～1927）が書いた『日本書目志』（15巻）は、書籍目録という体裁のため、康の他の多くの著作ほど研究されていないが、ユニークな作品として注目されている。所収されている日本書は約8千種あり、当時の中国で団体にせよ個人にせよ、その右に出るものがない。康の日本への関心の深さが伺える。また、生理・理学・宗教・図史・政治・法律・農業・工業・商業・教育・文学・文字語言・美術・小説・兵書といった15門に及ぶ分類は、旧来の伝統的な四部分類法にまったく依拠せず、西洋の図書分類法を最初に中国に導入した点も高く評価されている。そして、109条書かれている「按語」（コメント）は、康の日本をモデルとした政治改革に対する見解を知る好個の材料となる。

本書の康の序で、琉球が処分された際に、日本で商売をしている故郷の人に依頼して図書を購入し、甲午戦争後は、日本から購入した図書が大量に増加したため、『漢書』芸文志の例（「七略」の分類方式）にならって、この分類目録を作ったと書かれている。書名、冊数、著者、著作方式（著・訳・編等）、定価が記されている本書の記述法と考え合わせれば、いかにも康個人の蔵書に基づき編集された目録のように見える。そのため、それが「常識」となり、本書に採用された西洋式の図書分類法も康有為の独創だと思われる。

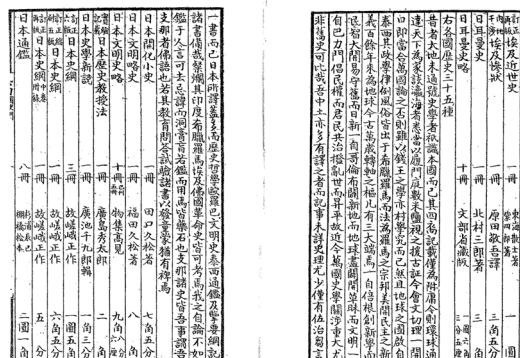
10数年前、筆者は、清末の外交官黄遵憲著の『日本国志』（1887年成立）、および近代最初の海外遊歴使傅雲龍著の『遊歴日本図経』（1889年刊）、両書所載の日本書目の出典を調べていた。なかなか進展せず、意地を張って、十九世紀90年代以前に日本で刊行された漢文目録をしらみつぶしに調べようと決めた。上記両書の出典はついに見つからなかつ

たが、『東京書籍出版営業者組合員書籍目録』という本に出会った。

東京書籍出版営業者組合事務所が1893年に編集出版した本目録は、東京にある122軒に及ぶ書店の1万余種の営業書を20門251類に分類し、分類索引、書名索引、発行所分索引等をつけた販売目録である。この目録をひもとくと、1898年に発行した康の『日本書目志』に酷似していることに気づいた。両書を仔細に比較してみると、『日本書目志』が本書を踏襲したことが浮き彫りになった。数学、外国語学、中国関係、宗教、欧文などの図書を除き、ほとんど『日本書目志』に所載されている。そして、図書分類法も適宜に改変はしたもの、おおむね『書籍総目録』に依拠したことが判明した。

明治の民間による総目録としての嚆矢とされている本目録は、その後『明治前期書目集成（補卷之四）』（東京：明治文献、1975年）、『明治書籍総目録』（東京：ゆまに書房、1985年）、『日本書籍分類総目録（明治篇）』（東京：日本図書センター、1988年）など、3種類の復刻版が世に生まれて、簡単に利用できるようになっている。たまたま「私が歩けば棒に当たった」のである。

犬が「棒に当たる」前提は「歩く」ことである。歩かなければ、思いがけない幸いにめぐりあうはずがない。満腹の時代に入った今日こそ、このような「歩く」姿勢がますます大事ではないかと思われる。



【康有為『日本書目志』より】

私の好きな小説

文学部国文学科 准教授 中谷いずみ

「好きな小説は？」と聞かれると、戸惑ってしまう。数ある中から選べないというもあるが、それだけではないと思う。「文学研究者」相手の社交辞令的会話であることが多いのだから、軽く答えればいいのだが、なぜか言葉が出てこない。以前、社会学の研究者に「文学研究者は自意識の強い人が多い」とからかわれ、その指摘が正しいかどうかは分からないが、私に限ればそうかもしれないと苦笑いしたことがあった。ただ急いで言い訳をするならば、自分の好きなものを知られるのが恥ずかしいというわけではない。好きな映画を聞かれれば、「ウエスト・サイド・ストーリー」をあげて、冒頭のカメラワークの格好良さやリタ・モレノの圧巻のダンスについて話すだろう。また好きな芝居を問われれば、蜷川幸雄演出「近代能楽集一弱法師」（三島由紀夫）をあげて、その観劇体験がどれほど密度の濃いものだったかを伝えようとするかもしれない。それなのに「好きな小説は？」と聞かれると、戸惑ってしまうのである。

それはもしかすると、小説を読む行為の特殊性に由来するのかもしれない。言うまでもないことだが、小説を読む時、私たちは書かれてある文字列から世界を想像し、その世界を追体験し、あるいは批判的距離を置く。登場人物の感情や行動に共感したり苛立ったり、情景に心を奪われたり、息を呑んだり、また視覚のみならず触覚的感覚をも疑似体験したりする。もちろんこれらの反応は、映画や演劇といった他のジャンルと変わらない。ただ異なるのは、その反応を生み出す世界が私の頭の中で創られたものであり、その意味でまさに、想像された世界は私だけの世界だということである。

例えば、活字を追う行為は時間を伴うが、その速度の調整は人それぞれである。描写のために尽くされた大量の文字列をゆっくり追うことで、クローズアップやロングショットを織り交ぜながら、その世界のイメージを目の前に鮮やかに浮かべることもでき、また時に活字を追うのを止めてそこに留まることもできる。情景描写のみならず、ある一つの発話

が心に刺さって読書行為を停止し、考えこんでしまうこともある。一方、逐一想像したり立ち止まったりせず、駆け抜けるように読み進めることもできる。どこでスピードをあげ、どこに時間をかけるかは、それぞれがもつ興味や関心の違い、どんなことに敏感でどんなことに鈍感か、何に感情や思考が動き何に動かないのか等と関わるものでもあり、人によって異なるだろう。また、頭の中で想像された情景がその人の経験による記憶に重なる場合、想像された世界は文字で書かれていること以上の要素を含むものとなる。いや、既知か未知かに関わらず、頭の中に浮かんたイメージが過去の経験を想起させ、涙や震え、痛み、安堵、安らぎ等々をもたらすこともある。小説の断片は私の記憶のドアを開けて心の壁に触れ、予期せぬ身体的反応を引き起こす。私たちは、文字の並びに自分の既知のものをアダプトすることで世界を生み出しつつ体験しているのである。

このように考えると、小説を読むという行為は、他者の物語を通して構築された「私の世界」の身体的経験といえるのかもしれない。ただし、このイメージされた私の世界は、私の占有物ではない。自分が経験したことのない時、場所、立場、社会的歴史的状況を生きる他者の物語を、完全に自身のものにすることはできない。どう考えればよいか分からないこと、想像できないことなど、戸惑いや困惑なども纏いつつ構築される「私の世界」は、それが他者の物語であることを常に突き付ける。その意味で、小説を読むことは、特殊な回路による他者との出会いといえるのかもしれない。

私が好きな小説を答えられないのは、私の中で生じる他者との出会いを、好きという言葉だけでは語れないからなのだろうか。それとも記憶や困惑が混濁して立ちあがった世界の経験があまりに私的なもので、話題にするまでに自分の中の整理が必要だからだろうか。つらつらと考えてみたものの、結局のところ答えは出ない。「好きな小説は？」という問いに、笑ってごまかす日々はまだまだ続きそうだ。

私の読書遍歴

—経営学の研究に必要な思考が磨かれた日々—

国際政治経済学部国際経営学科 准教授 小具 龍史

私の読書歴は、小学生の頃からスタートした。はじめに夢中になったのは、「それいけズッコケ三人組シリーズ（2015年には、主人公らが50歳を迎えた「ズッコケ熟年三人組」で完結したらしい）」で、高学年になると江戸川乱歩の「少年探偵シリーズ」などの児童文学作品にはまった。おかげで読書とはかくも楽しいものなのかと味をしめたのだが、寝る間を惜しんでのめり込んでいたためか、卒業する頃には、両目の視力があつという間に落ちてしまった。

中学生の頃は、いわゆる夏目漱石や太宰治、芥川龍之介、泉鏡花らの純文学作品を貪るように読み漁り、幻想的で美しく人間模様が描写された作品の虜になった。日本人の美德や日本語が紡ぐ文章の美しさについて、おぼろげながら学んだような気がする。

高校に入ると、H・G・ウェルズや小松左京、眉村卓らのSF文学作品に傾倒していった。「タイムマシン（邦訳版）」や「日本沈没（上下巻）」、「時の旅人—とらえられたスクールバス—（前中後編）」などの作品に夢中になった。いずれも実際には有りえない空想の話なのだが、これを超越した圧倒的な創造力による描写に魅力を感じて、没入したことを憶えている。

大学生になると、日本史（特に幕末から明治期）に関心があったこともあって、司馬遼太郎の「坂の上の雲」などの歴史文学作品、「明治」という国家（上下巻）などを好んで読んだ。特に「坂の上の雲」は、明治期における世界の中の日本という視点で描かれた壮大な物語にいたく興奮し、自身の生きる時代や社会における自身の存在を照らし合わせながら夢中で読んだ。

大学院生となり一年が経った頃、書店で偶然「精神と物質—分子生物学はどこまで生命の謎を解けるか—」という本に出会った。ノーベル生理学・医学賞を受賞した利根川進の半生を作家の立花隆がインタビューを通じてなぞる構成となっている。分子生物学という研究領域を通して、研究の本質とは何か（研究に必要な能力としての論理的思考やセレンディピティ等）ということを教えてくれた。自身の専攻分野（経営学）とは異なるが、当時、研究職を目指すか民間企業に就職するか悩んでいた私にとって、非常に役に立った本である。

二人の議論で印象的だったのは、「人間の精神が物質レベルで解明されれば、脳科学分野がいずれ人間の思考が創造してきた人文科学分野（哲学や文学等の学問）を統合するのではないか？」という点に関す

る議論である。当時、非常に考えさせられた記憶がある。現在では、人工知能が人間の脳の想像力を超えられるか？といった議論になっているが…

その後社会人となってからは、文学書を読む機会が減り、専ら顧客の業界やコンサルティングの方法論など、仕事に関わる専門書を読むことが多くなったが、そんな中で出会ったのが、「失敗の本質—日本軍の組織論的研究—」という本である（研究書と言った方が良さそう）。第二次大戦における日本の敗因について、戦史研究と経営学研究のそれぞれの領域を代表する研究者らの共同研究により、その本質を分析し解明するというチャレンジングな内容に衝撃を受けた。この本は今でも、自身が企業を見る際のバイブルとして携行する一冊である。

働きながら通ったビジネススクールおよび博士課程時代に会った本は、長きに渡り、第一線で日本の経営学を牽引してきた伊丹敬之先生の「創造的論文の書き方」である。いわゆる学習法・研究法に関する本ではあるが、その辺の類似タイトルのノウハウ本とはレベルが全く異なる。経営学に係る研究を遂行するために必要な姿勢（研究テーマの決め方・研究の仕方・考え方等）について、多くの「あるある」を通して詳述されている。自身が研究者として論文を書き、学生を指導する立場となった現在もお、幾度となく読み返しては示唆を得ている本だ。

私にとって本を読むということは、食事をするのと同じくらい重要なことである。食事をしなければ、成長しないし生きても行けない。今回、自身の読書遍歴を振り返ってあらためて思うのは、読書によって、経営学の研究に必要な創造的・論理的思考はもとより、「研究に対する姿勢のあり方、問いを立て、調べて、考えて、これを書く（伝える）」という一連の思考プロセスである研究的思考が磨かれたということである。

今の私があるのは、この成長のおかげである。



国立国会図書館「図書館向けデジタル化資料送信サービス」を開始

「図書館向けデジタル化資料送信サービス」とは、国会図書館が収集・保存しているデジタル化コレクションのうち、著作権保護期間が満了していない資料や著作権の確認が未完了の資料などを、一定の条件の下、本学図書館で閲覧・複写できるサービスです。

今まで国会図書館に行かなければ見ることのできなかった下表のような約 149 万点もの資料を身近で利用できるようになりました。(令和元年 7 月現在)

図 書	昭和 43 年までに受け入れた図書、震災・災害関係資料の一部 約 57 万点
古 典 籍	明治期以降の貴重書等や清代後期以降の漢籍等 約 2 万点
雑 誌	明治期以降に発行された雑誌（刊行後 5 年以上経過したもので、商業出版されていないもの）約 1 万タイトル（約 79 万点）
博士論文	平成 3 ～ 12 年度に送付を受けた論文（商業出版されていないもの）約 12 万点



他にも、デジタルコレクションの中には、著作権満了や著作者の許諾を得てインターネットで公開しているものや、国会図書館内に設置された端末でのみ利用できる資料も収録されています。

この機会に是非利用してください。

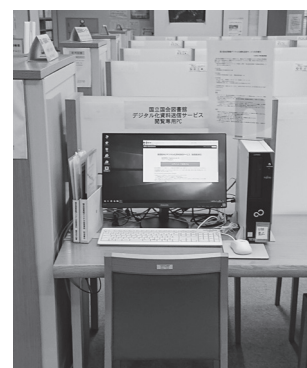
利用要領

○利用対象者…本学図書館の利用資格を有する方。

○利用時間帯…開館日の閉館 30 分前まで。

但し、土曜日は利用できません。開館日時は HP 等で確認してください。

○利用可能場所…九段図書館内の専用端末 1 台（右写真）



○利用方法

◇閲 覧

①カウンターで所定の受付票に必要事項を記入の上、教職員証・学生証・又は図書館利用証を提示してください。利用できる時間は 1 時間以内です。(次に利用者がいない場合は、延長して利用できます。)

②図書館員によるログイン後、「国立国会図書館／図書館送信限定」と表示される資料を利用できます。

※**画像のダウンロードや保存、画面コピーやカメラでの撮影は禁止です。**

③利用が終了したら、ブラウザを閉じてカウンターに申し出てください。

◇複 写

①端末横にある所定の複写申込書に記入の上、カウンターに提出してください。

※**複写できるのは著作権の範囲内となります。**

②複写は図書館員が行います。※複写物の受け取りは翌開館日以降となります。

③複写物を受け取る際に、複写料金を支払ってください。

※**料金はモノクロ 1 枚 10 円、カラー 1 枚 50 円です。**



3兄弟がチャレンジ!

発想力UPにつながる ホワイトボード活用術

今回は僕たち3兄弟が
付せんとホワイトボードを使って
「ラーコモをアピールする方法」の
アイデア発想法を実践してみたよ!

ミニ冊子
配布中▶

付せんを使った
アイデア発想法

ブレインストーミング & KJ法

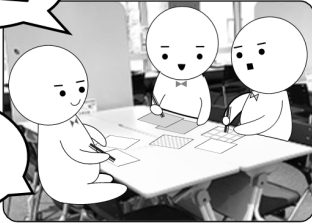
1 付せんを使ってアイデアを広げてみる

POINT

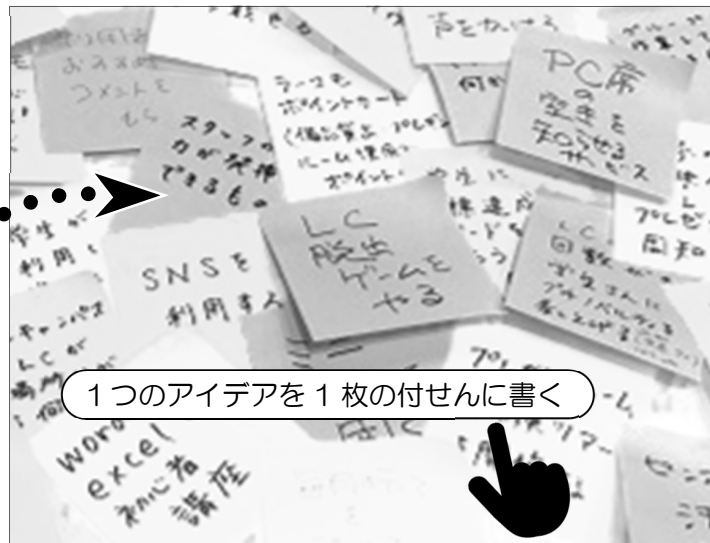
- 思い付いたら何でも書く
- ムリそうな案でもOK
- 評価や順位づけはNG

質より量

遠慮は
NG



▲ラーコモならディスカッション大歓迎



1つのアイデアを1枚の付せんに書く

2 アイデアを書いた付箋を ホワイトボードに貼ってみる



まず、
似たアイデアを
まとめよう

やってみてね!



▶付せん&
マーカーは
1Fカウンターで
借りられるよ

次にグループ同士を
まとめて
図式化しよう

3 アイデアをまとめてみる



POINT

- 途中でアイデア追加もアリ
- グループ化できないものはそのまましておく
- 結論は1つでなくてもOK

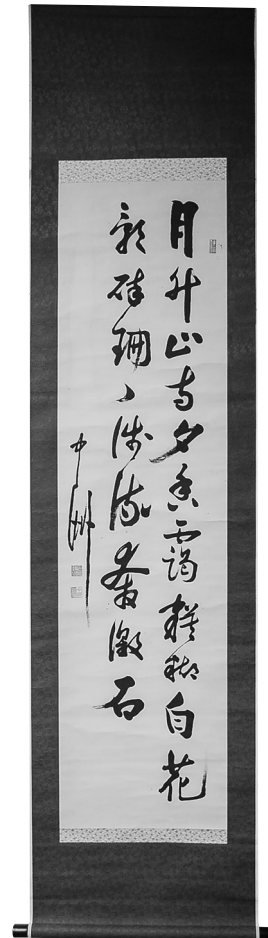
企画の方向が
見えてきたかも



クー

本学所蔵資料紹介

三島中洲 書幅 明治三十六年



月升山寺夕 月は升る 山寺の夕
香靄模糊白 香靄 模糊として白し
花影碎珊瑚 花影碎くること珊瑚たり
浅流奔激石 浅流奔りて石に激す

山寺の夕暮れ時、月が昇ってきた。梅の花は香ばしい靄のようで、ぼんやりと白い。花の影が碎けて音を立てる。浅い水が流れて、石にぶつかるのだ。

『三島中洲詩全集』第三巻より

この漢詩は、明治三十六年二月二十五日、中洲が入江雨亭（本名・為守、子爵・二松学舎に学び、のちに二松義会初代会長を務める）らと共に沼津市沢田の大中寺（臨済宗）を訪れ、見事な梅を觀賞し、雨亭の詠んだ絶句四首に次韻して詩作したものである。

中洲は明治二十九年三月に東宮御用掛、六月に東宮侍講となり、十二月に皇太子（のちの大正天皇）が沼津に避寒された際、随行している。その後も沼津にて侍講。『大中寺と沼津御用邸』（高橋友道編著 一九七六年）によると、大中寺は、天皇家と関わりの深い寺で、中洲はこよなくこの寺を愛し、しばしば訪れ、漢詩を詠んでいる。また「大中寺梅園記」を寄贈している。

新着図書 おすすめの1冊

澤村修治著『ベストセラー全史【現代篇】』（筑摩選書） 筑摩書房 2019年6月 [請求記号] 081-C-176

『ベストセラー全史』は、ベストセラーの「登場事情から売れるまでの経緯、著書の動機や刊行側の意図などを通史的に紹介していくとともに、社会の変動や人びとの意識がどう反映されたのかを考察していく」ことを目的として書かれたもので、今回紹介するのはその【現代篇】です。

【現代篇】は戦後の1945年から2019年4月（平成末）までの期間について述べられています。「戦後二〇世紀」と「二十一世紀」に大きく分けられ、それぞれの冒頭にベストセラーの一覧が掲載されています。巻末には「戦後の総合ベストセラーリスト」と「絵本の歴代ベストセラーリスト」もあります。さて、戦後に一番売れた本は何でしょうか？ 気になりませんか？

ほかに本書には、太宰治の「斜陽」が1948年のトップセラーになった社会背景、ベストセラーを出した出版社がどうなったのか、テレビの登場がベストセラーにどのような影響を与えたのかなどなど、ベストセラーに関することが大変多く記されています。皆さんが耳にしたことのあるベストセラーの裏側を垣間見ることができます。

なお本書の刊行後、明治時代から昭和の戦前・戦中までを取り上げた【近代篇】も刊行されています。こちらも合わせて読むとより面白いのではないのでしょうか。

本学教職員著書紹介

『裏切られた美術』 —表現者たちの転向と挫折1910-1960—

足立 元 著
(ブリュッケ 2019年6月1日発行)
B6版 318頁・3,600円＋税
ISBN：9784434260698



2019年8月、あいちトリエンナーレにおける「表現の不自由」展の中止が話題になりました。この『季報』が出る頃にもまだ問題は続いているかもしれません。元々「表現の不自由」展とは、1967年に、警察に起訴された美術家の赤瀬川原平を救うカンパを集めるために企画された展覧会の名称でした。

赤瀬川は、資本主義社会を直接的に描くものとして模型千円札を制作・配布したところ、それが偽造千円札だと見なされて逮捕され、有罪となったのです。けれどもその後、赤瀬川とその仲間たちの活躍もあって、今日ではその模型千円札は1960年代美術史を象徴する作品となりました。転んでもただでは起きない強さが、表現者には求められるのでしょうか。

さて、わたしが著した『裏切られた美術』は、1960年代美術史に先立つ歴史を描いたものです。社会を揺るがず過激な表現とそれに対する抑圧は、はるか昔からありました。迷惑だと思う人もいるのでしょうか。とはいえ、表現者の中には、社会問題に関心を持つ人も少なくありません。創造のためには社会の本質を考える必要があるし、豊かな感受性をもっていたら社会の中で傷ついた人々に無関心でいられないからです。しかし、社会問題に取り組んだ表現者は、多くの場合、まともな評価を受けられず、運動も失敗して消えていきました。

それでも、わたしは、表現者たちの敗北の経験を、むしろ肯定的に評価できないだろうかと考えてきました。人は、自己や他者や社会に裏切られ、事物のむき出しの残酷な本質に触れたところから、表現が始まると思うからです。そして、たとえ失敗に終わった活動であっても、そこに意味を与えるのは、後世の今を生きる研究者の仕事ではないでしょうか。

ちなみに、最初、本書の帯に考えていた言葉は、本書の中の一節から採った「これでは展覧会にならん。畜生！」というものでした。1931年に警察が暴力的にある展覧会を破壊したときの人々の嘆きです。しかし、たとえ作品が残ってなくても、何かを残そうとした意図は残ります。本書は、タイトルの割に、意外とポジティブに現在の表現者たちを応援しています。

文学部国文学科 専任講師 足立 元

編集後記

「季報」106号をお届けします。
ご執筆いただきました皆様にまず厚く御礼申し上げます。
本号では「読書」をテーマに原稿を依頼しました。こちらの文章を読んで、皆さんも「読書の秋」を満喫してみてください。また、今号で取り上げました国立国会図書館のデジタル化資料送信サービスも「勉強の秋」の手助けとしてご利用いただければ幸いです。(S・A)

二松学舎大学附属図書館

季報

第106号

発行日 2019年11月1日

発行 二松学舎大学附属図書館

九段図書館 〒102-8336 東京都千代田区三番町 6-16

電話：03-3263-6364

柏図書館 〒277-8585 千葉県柏市大井 2590

電話：04-7191-8758

印刷所 株式会社 サンセイ

電話：03-5227-8333